

適切に議論ができるとは限らない。X (旧 Twitter) のように一度に発信できる情報に制限があつて一部分だけが一人歩きしてしまう場合 (現在、有料会員では文字数制限が大幅に緩和されている) や、TV 番組や新聞という媒体において制作側の意向で編集が入ってしまう場合など、本人が意図しない形で発言とその影響が拡散していくことだつてある。すなわち、これらメディアの文脈では、情報を発信する専門家だけに責任があるのではなく、情報の受け手である専門家・非専門家にも、玉石混合の情報を選別する責任・必要がある。まさしく情報のリテラシーの問題だ。

本書では現代社会における上記のような問題について、専門家の役割やあり方が検討されていく。ベースとなっているのは、編者である村上陽一郎氏のオンライン私塾 (Wireless Wire News 編集部, スタイル株式会社) で開催された「専門家とは何か」という連続講座である。入手経路や版によっては外されているかもしれないが、本書の帯に示されたキャッチコピーを引用しておこう。

私たちは何を信じればいいのか？

不信をぬぐい、対立を超えて一激しく揺れ動く社会で求められる知のありかたに9つの観点から迫っていく

誰が誰に対する不信感を持っているのか、誰 (何) と誰 (何) が対立しているのか、ここで言われている「知」とはどのようなタイプの「知」なのか。本書において執筆陣がそれぞれの問題関心から提示する論考の共通項をうまく取り出した煽り文である。

Web 上で検索すれば本書の目次や詳細はすぐに出てくるであろうからここでは省略し、補完的に、各論者の論考の内容を簡単にまとめ直して内容の概略を示すこととしたい。

- 村上陽一郎：【巻頭序言】専門家の定義に関する歴史的説明

- 藤垣裕子：多様な知の結集を可能にするためのリベラルアーツ教育の実践 (異分野交流及び専門家と素人の交流に必要なスキルの訓練)

- 隠岐さや香：専門家の定義に関する歴史的説明 (専門的助言者としての役割)

- 佐藤卓己：多様な情報が溢れている現代におけるネガティブリテラシーの重要性

- 瀬川至朗：ネットにおける専門家の信頼低下を踏まえた科学者とジャーナリストの共同の必要性

村上陽一郎編

藤垣裕子・隠岐さや香・佐藤卓己・瀬川至朗・
神里達博・佐伯順子・小林傳司・
鈴木 哲也著

『「専門家」とは誰か』

(晶文社, 2022年, 264頁)

野内 玲 (広島大学)

専門家は、人類・社会が直面した危機に颯爽と登場し、学術研究で獲得したその専門的知識を踏まえて助言をしたり、問題解決のための方策を検討したりする。本書冒頭でも挙げられている通り、COVID-19ではさまざまな「専門家」が SNS を含むメディアで見解を発したことは記憶に新しいだろう。「正解」の見えない中での専門家からの積極的な情報発信は、われわれに安心をもたらすこともあった。しかし、中には学術的に誤っている情報も見受けられたようにも思われ、専門家同士による議論の応酬が多発した。

何かの専門家であっても、別の領域に行けば素人になる。そんな単純な話であれば良い。しかし、自身の専門領域においてさえ専門家の情報発信には誤りが含まれるということもあつて悩ましい。これが学術的な論争であれば、論文や学会等の場でそれぞれの研究実践をもとに議論ができる。しかし、アカデミアとは異なる場所で

- 神里達博：BSE 問題を事例にしたリスク評価・管理に関する専門家（科学）と行政（政治）の関係
- 佐伯順子：明治期の教育実態から学ぶ、現代における「教養」ある「専門」家の養成の必要性
- 小林傳司：旧来の意味での専門家（エキスパート・ジャッジメントが可能な人材）に加え、専門領域を媒介する専門家の重要性を提起
- 鈴木哲也：研究分野への「貢献型専門知」を前提とした「対話型専門知」への意識、さらには専門知を社会に結びつける「運動としての専門知」を提案

以上のように、本書は語源や概念の問題として専門家の定義や成立経緯を確認した後、他領域や社会との接点における専門家の役割が検討されていく。ある種の共通した帰結として言えそうなことは、複数の領域間での情報の伝達に際した「ゲートキーパー」としての専門家の役割の重要性である。専門的知識をきちんと理解し、それを別の領域へと繋げていく。繋げていく先は他研究分野であったり、行政の現場であったり、社会（市民の生活の場）であったりする。そのことが可能になるためには、蛸壺化した特定の領域的知識だけでなく、繋げていく先の知識、繋げるための手法の理解、発信された情報を受け取るために必要な知識も重要になるのである。

さて、このように多様な観点から専門家の役割が描かれているものの、本書それ自体として最終的に何らかのまとめは示されていない。各論者の論考にはそれぞれ共通する部分もあり、論者同士の相互検討・批判の余地が開かれている状況からすると、もう少し先を見てみたいという読後感が残った。とはいえ、本書の母体は一般に向けられた web 講座ということもあり、様々な見解を幅広く提示するという意味では目的は達成されているように思う。今後、本書を通じて更なる議論が展開されていくことが期待される。以下ではそうした展開の試論として、佐藤氏の論考を踏まえた見解を述べたい。

多くの人は何らかの発話を相手が受け止め、投げ返してくれるという一連のプロセスを持ってコミュニケーションの成功だと考えるだろう。しかし、論者の中で佐藤氏は専門知のコミュニケーションに関して若干別の観点を提示している。佐藤氏が掲げたネガティブリテラシーとは、「投げ返さない（発話を控える）」ことを重要視するものである。現代では web を介して、自ら望むにしろ望まないにしろ、非常に多くの情報に接することができる。多くの人がメンションしたものを、興味を持ったもの、クリックしたものが他の人の目に触れやすく

なっていく。そのような「単純化された」情報の海に浮かんでいる状況では、情報の真偽を自分で確認する暇もないほど、常に新しい情報が我々の目の前を流れていく。そうした状況において佐藤氏は判断を保留することを提案する。

科学技術社会論の文脈において科学コミュニケーションの文脈に市民や非専門家を取り込もうとする場合、専門家は彼らと適切な知識を共有し、彼らに同じ議論の場に乗ってもらうことを目的とする。しかしそうした状況はあくまで理想であって、そう上手く事が運ばない場合も往々にしてある。市民や非専門家は専門家から投げられたボールを受け取れないかもしれない。受け取ったとしてもそれがストライクであるか、ボールであるかを決められないこともある。その時に外から「ストライクだ」「ボールだ」と声を届けて、判断を強制させて良いのだろうか。専門家は市民を議論の場に参加させることが重要だと言う。そこまでは良い。だが議論に加わるのがあたかも最善であるかのように迫ってはいないだろうか。投げられたボールの処遇について、ただ、様子を見る。分からないことを分からないまま曖昧にしておく。それも非専門家が選んで良い選択肢の一つであり、専門家はそのことを許容しなければならない。

この選択肢を許容することは、科学的知識に関して抱きがちな誤解から市民を解放してくれるように思う。その誤解とは、「科学は正しいものだ」という信仰や信頼である。もちろん科学者は嘘を述べているわけではない。しかしながら、科学者は自身の研究によって得られた見解を絶対に間違いのない真理として提示しているわけでもない。科学的な研究成果は批判され、適宜修正されていくものとして提示されるのである。もちろん自説を擁護したり、固執したりといった態度を科学者が取ることはあるかもしれないが、科学者は多くの可能性の一つとして目の前の研究成果を扱っている。科学的知見について判断を保留しても良いのは、科学的知見とは暫定的な知識だからだ。

メディアがそうした科学的知見を取り扱う場合は、時にセンセーショナルに文脈を恣意的に切り取った形で紹介することがある。そしてそれを見た市民は成果の側面だけを見て、それを真実と見做してしまう。本来ならばそこで一旦立ち止まって批判的に吟味するという態度（クリティカルシンキング）が必要なのに、である。しかしながら、誰もがこうした批判的吟味ができるわけではない。評者の専門である科学哲学分野では、かつてクリティカルシンキングに関連する本がたくさん出版され

た。大げさに書けば、「きちんと考えることのできる市民」を養おう、これこそ思考や説明というものそれ自体を研究対象としている哲学分野の社会貢献だと騒がれた。もちろん、そんなブームを若干冷ややかに見る向きもあっただろう。すなわち、そうした思考にコストをかけることができない人も多いのではないか、という現実的な捉え方である。そうした現実を踏まえれば、積極的に判断することを控えることは、専門家から発信された情報に対する向き合い方として非専門家が選ぶことができる一つの重要なリテラシーであるように思われる。